

編集後記

先日の新聞紙上に某大学の卒業式における学長の告辞に関する記事が載っていた。告辞の中で「誇り」という言葉をなんと64回も繰り返したという。現代社会は「誇り」を持って老いることが難しい現状や、官民のスキャンダルの背景には原因に「誇り」喪失があると指摘している。また国家公務員の25%削減などのリストラ論について「数値目標ばかりが一人歩きし、誇りを自粛せよ、といていることに他ならない」と、疑問を示したとのことである。私立大学の医療現場でも、医療人としての「誇り」と昨今の医療経済との関係は忸怩たるものがある。また昨今の数々の医療ミス事件報道も「誇り」の喪失傾向に根源があるのかもしれない。

翻って、日本消化器外科学会雑誌は歴代の編集委員長を筆頭に外科系最高の質の高い邦文誌をめざしてきたが、目標が達成されるに従い悩みを抱えざるを得ない状況に至った。つまり、より質の高い原著がインパクトファクターの高い英文誌への投稿に流れる傾向に抗しきれず、原著論文の投稿数が期待するほど伸びないという現実直面している。この流れを打破し、かつ質の高い邦文学会雑誌としての立場を確立する方策はないものだろうか。ここ数年の間に日本消化器外科学会雑誌は「臨床経験」, letters to the editor などの新しい投稿様式を加えた。今後は邦文誌としての雑誌の個性を作り上げることも必要ではないかと考えている。

とにもかくにも、我々の学会誌をよりよいものにするためには学会を構成するメンバー全員の協力が必要であることはいうまでもないことである。今後とも「誇り」を持って投稿してもらいたいし、査読への返答も自らの研究、仕事に関して「誇り」を持っていただきたい。我々編集委員一同も「誇り」を持って仕事をしたいものと願っている。

(熊谷一秀)